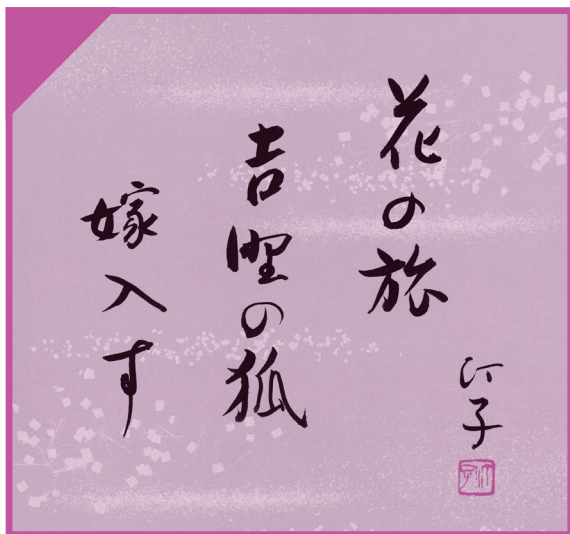


詠風集

五月号



花鳥諷詠®



令和4年5月■第410号 ———— 目次

追悼 稲畑汀子名誉会長 1

花鳥諷詠選集 木村 享史19
和田 華凜21

第三十三回日本伝統俳句協会賞

受賞者のことば24
選者評25
選考経過報告31

虚子研究 虚子宛書簡を読む（三十四）

明治二十五年九月十日虚子宛りう書簡 封書 椋 誠一郎33

虚子研究 『六百五十句』研究（27）38

一頁の鑑賞 日置 正樹42
椋 麻里子43

卯浪44

この人の作品 小川のぶこ46

地区行事開催日程表47

編集後記48

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

花鳥諷詠選集

木村享史 選

特選五句

白鳥の首もたげつつ明くる湖

奈良河村 久美子

母の手をさすりて涙日向ぼこ

千葉鈴木 真沙枝

折れてゐるところ風道野水仙

名古屋 齊藤 始子

暗がりにマスクの波や初詣

福岡三坂 一生

日脚伸ぶ妻は慌てて厨事

名古屋 浅井 ひと詩

二句短評

一句目——空には消え残る太白が一つ、東の空に曙光の兆す頃、渺々の湖面に夜明けが訪れる。

かわたれの明りに覚めて、首をもたげ始めた白鳥、天地有情、乾坤黎明の静謐が描き出されて見事。

二句目——ペンチかそれとも縁側か、老い母と並び、その手をさすりつつ幸せに満ちた日向ぼこり。

齢を重ねて刻まれた深い手の皺に、湧いて出る作者の涙は、慰労と感謝と喜悦の結晶なのであるう。

入選六十句

青ければ青き空ほど湧く秋思

横浜 竹田登代子

赤いシャベル黄色いシャベル雪を掻く

白岡 細井 路子

六甲の風音水音春近し

泉大津 多田羅初美

侘助の一輪挿しにある気品

福知山 松山 牧子

新しき靴をおろして初句会

横浜 稲畑実可子

すれ違ふ友も散歩や春を待つ

四国中央 豊田 耕造

古刹二寺音を重ねて落葉掃く

八王子 小町谷滋子

幸せは気づかぬものよ福寿草

佐賀 古庄たみ子

一番に色をこぼせし犬ふぐり

伊賀 前出美千子

水仙の風に岬の揺れてをり

太宰府 川路 泰子

平凡な暮らしに活ける福寿草

金沢 金子 慶一

今朝も見てまだ一輪の軒の梅

君津 榎本 静江

いつの間に道なき在所梅の里

羽生 折原 秀子

地に未来託し寒肥施しぬ

泉大津 多田羅紀子

コーヒートを挽いて窓辺の春隣

豊中 山下 幸典

天も地も光あふるる寒の明け 川口 櫻井 松翠
 神妙の膝並びゐて初点前 兵庫 松下 孝裕
 寒明の妻いきいきと外出す 金沢 森田 康夫
 いつも来る笹子に順路あるらしく 福岡 馬場 紀子
 美しく老ゆるは難し冬椿 福山 箱田富久恵
 山風の音に春待つ社かな 出水 沖 弘子
 雪雲の去りて琵琶湖に戻る色 八尾 米澤 悦子
 ビル風にゆるる紙垂一の午 光 田村 文代
 蘂苞は男結びや寒牡丹 阿南 かつせ千津
 青空を支へてをりぬ霧氷林 北見 山崎 肆子
 ホスピスの寒灯一つ午前四時 平塚 渡邊 久也
 立春の空に一粒明けの星 長崎 植村 華文
 白梅の一輪といふ静けさよ 香川 三宅久美子
 早梅や分れて枝に一つつつ 和歌山 市ノ瀬翔子
 一切を闇に沈めて月冴ゆる 鹿児島 永井 紀子

一人居の七種粥を愛犬と 東京 齋藤 澄子
 まつ青な空を横切る寒鴉 八代 山下さと子
 待春の心支へに籠る日々 長岡 安井 里子
 土入れて早春の香となりし庭 西宮 本郷 桂子
 留石の棕櫚縄ほつれ藪柑子 札幌 増田 植歌
 乗初や俳句が好きで旅好きで 宇佐 尾崎 陽子
 風すぎて水仙の香の広がりぬ 福岡 井野 弘子
 探梅や俳句ポストは帰り道 高知 和田 和子
 一日の終はりの電話あたたかし 島原 池田みを子
 北山の消えて雪積む鴨河原 東大阪 中田 豪起
 変る街変らぬ城址梅真白 福岡 阿部 弘子
 まだ風をつかめぬほどの柳の芽 姫路 上原 康子
 薺打つ野の香野の彩広げつつ 糸島 藤原 泰子
 日脚伸び明るさに立つ夕厨 白山 西 登美枝
 竹林の風を余寒の音と聞き 下関 古村美都子

そよ風に水仙の香の満ちてくる

四国中央 豊田みゆき

大川の流れ駘蕩春立てり

大阪 西川寿賀子

立春の富士泰然と雲寄せず

川崎 飯川 三無

競ふごと勢子の走りて野火を守る

神戸 長谷 元子

雪を搔き朝刊を手に戻りけり

小諸 丸山 ま美

風花や天の輝きこぼれくる

神戸 内田 泰代

引越しの荷の出て残る古障子

東京 岡田 圭子

針供養コロナマスクを縫ひし針

神戸 三木 雅子

重ね来し忌の白梅として仰ぐ

輪島 長徳谷とし

こもり居の声を明るく初電話

総社 剣持 章子

墨を磨る水やはらかに春立ちぬ

伊賀 西澤与志子

雪搔をせねば届かぬ回覧板

鳥取 椋 則子

散策の人声日がな梅の谷戸

鎌倉 緒方 初美

梅見人臨時停車の駅に混み

金沢 西田さい雪

倅せに老いて米寿や毛糸編む

川西 大西 水芳

●和田華凜選

特選五句

小面に朝日差し込み春立ちぬ

浜田 三 沢 孝子

一湾の景も丸ごと野梅林

糸島 占 部 ゆき江

星明り加へ氷柱の太りけり

八代 山下 しげ人

海苔粗朶に人影一つ潮満ち来

鹿児島 柳 橋 宏子

園児皆歌つて描けるチューリップ

神戸 大 西 芙紗子

二句短評

一句目——小面は能面の女面のこと。立春の朝日が何とも優しい。能面には表情はないと言われるが、この小面は早春の光の中、美しい笑みを浮かべているように作者には見えていることが伝わる。格調の高い句。
二句目——強い野梅の香の中にほんのりと潮の香が流れている。その一湾の景を「丸ごと」と大胆に句に詠み込み、野梅林の大景を描いた。視覚と嗅覚が刺激される。言葉の写生力の強さに心惹かれた。

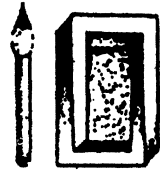
入選六十句

早春の光海より深山より 岡山 岩崎 正子
 諷詠の道を恵方と疑はず 神戸 池田雅かず
 野辺に足す新しき香や春立つ日 高松 もりおかともこ
 どか雪を漕ぎて新聞少年来 富山 片桐 久恵
 湖を見る人も加はる雪景色 鳥取 中前 惇子
 下萌や牧に栗毛の嘶ける 高松 豊島 禮子
 点々と点点と星凍つる 大牟田 石橋 武子
 平凡な暮らしに活ける福寿草 金沢 金子 慶一
 風花や山家の軒を輝かす 福島 坂野 洋三
 ほつぺたの大き赤子よ春隣 藤岡 清水 静子
 年の瀬や変らぬものに遠き富士 浜松 朝井 治代
 水仙や背筋伸ばして風の丘 神戸 玉手のり子
 七種にパセリも添へしスープかな 高知 河野 紅柳
 ほとばしる水の匂よ梅探る 白山 鈴木 恵子
 これよりは足し算ばかり春隣 福岡 今中 榮泉

初音あとやはらかき風山の寺 高松 渡部 全子
 悴みて祈りの如く組む手かな 福岡 梶原 敏子
 美しく老ゆるは難し冬椿 福山 箱田富久恵
 寒さより戻り寒さの夜の厨 平川 丹野 慶子
 確かなる命の光冬の蝶 松江 三浦 純子
 大鮪指一本で糶り上がる 西予 末光恵美子
 立春の暦が先に走り来る 高砂 中水 大介
 やや小さき寒満月の屋根濡らす 姫路 小林 智子
 太陽に包み込まれて野に遊ぶ 高松 岩瀬由美子
 冬の梅空よりわづか白くあり 鹿児島 手打 桃果
 白鳥の首もたげつつ明くる湖 奈良 河村久美子
 買初は花びら餅と決めてをり 神戸 平尾 孝子
 土入れて早春の香となりし庭 西宮 本郷 桂子
 ばたばたと空を叩いて干蒲団 熊本 宗像 和子
 夕映の阿蘇の枯野の中帰る 久留米 平岡 清志

早春や森にしづもる木々の声 高松 信里由美子
 夢叶ひさうなる窓辺梅ふふむ 姫路 清瀬 環
 春夕焼ふんはり長く寺の鐘 宮崎 南 瑛子
 旧正月寿ぎ立てる大漁旗 姫路 亀井 白溪
 真直ぐやためらひの無きスキー跡 北海道 安田 豆作
 菜の花の大河となりて橋くぐる 藤岡 飯塚 柚花
 日輪の大地に潤む雨水かな 高崎 吉井たくみ
 待春や絵表紙ながむ書舗めぐり 鹿児島 岡村るみ子
 句と共に悔なき余生年迎ふ 加古川 釜江喜代子
 乾坤の呼吸の合ひて草萌ゆる 島原 八木 花栗
 この風にこの日に確と春立ちぬ 大阪 酒井 湧水
 変る街変らぬ城址梅真白 福岡 阿部 弘子
 祝ごころ偲ぶ心も梅二月 吹田 河辺さち子
 浦町に明るさ戻る春時雨 浜田 堀本 満子
 野火走る先にも勢子の待ち構へ 東京 不破 澄子

まだ風をつかめぬほどの柳の芽 姫路 上原 康子
 白魚の影を生むまで掬ひ寄す 三田 吉村 玲子
 大いなる大地もありあげ草青む 摂津 小西 真子
 長子には一文字貫ひ紀元節 室戸 山本 千秋
 柁を挿して早早門閉ざす 高知 長田 貴代
 紙ひひな飾りて老を楽しめり 四日市 栗原ひろ子
 まんさくの金にあふれる美濃の花器 芦屋 田村恵津子
 遠目にも露の臺らし土手の色 郡山 市川 瑞枝
 荒波の育てし能登の海苔を搔く 白山 辰巳 葉流
 切れ切れを繋ぎ初音とわかるまで 渋谷 今井 芑子
 薄氷の解けて素直に暮るる夕 倉敷 中田 鈴江
 寒夕焼光の波のつなぐ島 倉敷 江原由美子
 冬天に白々と月貼つてあり 東京 村上 紗知
 墨を磨る水やはらかに春立ちぬ 伊賀 西澤与志子
 徐々に春素描に色をおくごとし 宇佐 磯永喜八郎



編集後記

その未明我が家も焼けぬ原爆忌

汀子

三月一日、新聞の一面に汀子名誉会長の訃報が掲載された。その上段にはロシアによるウクライナ侵攻をめぐる記事が並んでいた。十四歳で家を焼かれた汀子先生。その後、生きとし生けるものを愛し続けたその人は、きっとこの記事に心を痛めていただろう。子供が、女が、老人が、すべての人々が安全を保障され、不当な差別や迫害を受けることがないように、一日も早く戦争が終結することを祈ります。

●今月号は、汀子名誉会長の追悼記事と、協会賞の選者評をお届けします。悲しいことと嬉しいこと、ないまぜなのが人の世なのかもしれません。

●総会は例年往復はがきでお知らせしていましたが、本年は追悼会のお知らせを同封したため封筒でお送りしました。出欠は同封のはがきで早めにお知らせください。欠席の場合は委任状も必ず記名押印お願いいたします。新型コロナウイルスの状況により変更を余儀なくされることも予想されますが、随時お知らせいたします。なお、追悼会ご出席者には持ち帰っていただくため花鳥諷詠別冊「俳人・稲畑汀子」（仮題）を製作中です。

●来年のこともカレンダーの俳句と絵を募集しています。今月号に専用の投句用紙を閉じ込んでおりますが、郵便はがきでも応募できます。ご家族やお

知り合いに高校生以下のお子様がい
らっしゃいましたら、ぜひお勧めくだ
さい。
須川 久

●花鳥諷詠選者予定

掲載	締切り	選者
8月号	5月20日	岩岡中正
9月号	6月20日	木村享史
10月号	7月20日	岩岡中正
11月号	8月20日	木村享史
		吉岡乱水

花鳥諷詠五月号(通巻第四一〇号)

定価二五〇円 但し、本代は年会費を含む

年会費一〇、〇〇〇円

令和四年五月一日

発行人 岩 岡 中 正

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二一八九

シャンブル笹塚二一B二〇一

電話 〇三三四五四五一九一

FAX 〇三三四五四五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇七二八六八二〇

印刷所 日本ハイコム㈱

〒112 0014 東京都文京区関口一一九二